

オレはソファーに踏ん反り返ると見せつけるように大きく足を広げ、内股をモジモジさせているベルに一瞥をくれた。「コレを下の口いっぱい頬張りたいんだろ？ なら、さっさと脱いで自分で挿れる」

「え……」
ベッドに連れて行ってもらえるだけでも期待していたのか、喉を鳴らして一点を凝視していたベルの顔つきがぼかんと固まる。

「いらぬのか？」と言外で言い、未だ硬度を保ったままのペニスを二、三度抜いてみせると、ベルは少々不満げながらもブーツを脱ぎ捨て、恥じらいなく下肢を露にし、上は着たままで腰に跨ってきた。

さっきみたいに両手が首に回され、期待を諦めきれないと言いたげな視線が注がれる。

だが、頑として不動を決め込んでいると、渋々折れたような溜息の後、ベルの指が髪にまだ残る白い雫を拭い取った。そしてその手を後ろに回し、自身のアナルにローション代わりに塗り込め、解し始める。

体は大分出来上がっていたのか、逸る気持ちを抑えられないのか。

ベルは数分と経たないうちに指を抜くと向き直り、まあるいお尻の奥でヒクつくソノ部分をオレの先っちょにぴとっとくつつけてきた。

「あ、アッ……あ……ふ、ン……あ、あアァ……」
「う……っく、んン……」

「あはッ……キテる……うん……ジルのチ×コ、入ってキテるうッ……」

ゆっくりと腰が下ろされ、少しずつペニスが飲み込まれていく。

ベルの中は熱く柔らかく蕩けていて、唾内とは比べものにならないほどの快感がそこから体中に広がっていく。

腰を突き動かしたい衝動に駆られるがここはグッと堪え、ベルが自分で全部挿れ終えるのをただひたすらに待った。

「ア、ああ……おはあああっ!!」

完全に腰が沈むと一際高い嬌声が上がリ、ベルの全身がビクビク跳ね上がる。

まさか、挿れただけでイッた？

視線を落として互いの腹の間を確認するが、絶頂の白い証は見当たらない。

「どうやら空イキしたようだ。」

「あは、ああ……」

「どーしたよ、ベル。一口で腹いっぱいになっちゃったか？」
「ううん、ダメ……まだ……まだ……まだ、足んない……これだけじゃ全然足んないよ……」

ベルは先っちょの割れ目からトロトロ先走りを垂れ流したまま、放心状態から戻ってこない。